

# キリスト教－イスラーム関係史研究の 動向と課題

河底 佑佳

## 1. はじめに—これまでの研究動向と本稿の目的—

今日、キリスト教とイスラームの関係が非常に大きなテーマとなっているのは言うまでもない。2005年には、1960年代から2000年前後までのキリスト教－イスラーム関係を扱った英語の代表的諸研究をまとめた研究動向が、近現代キリスト教史研究者 G. ミラーによって発表された。その中でミラーは、米国内で入手可能なイスラーム関連文献の出版数は2001年以降、1年に352冊と1998年から2001年の216冊という平均値から大きく上昇したと述べている<sup>(1)</sup>。ミラーによるこの記述は Books in Print<sup>(2)</sup>による検索の結果であり、その全ての出版物が学問的な成果であるとは言いがたい。しかしながら、こうした文献の量的充実が、キリスト教とイスラームの関係を扱う研究全体の見取り図を単純化して描くことが困難であることを示していると言えよう。こうした状況下において、ミラーによるまとめはキリスト教－イスラーム関係を扱う学問的に重要な文献を提示するために有益である。まずは以下においてミラーによる主張を概観し、今日におけるキリスト教－イスラーム関係史の研究動向を探る糸口としたい。

ミラーはキリスト教－イスラーム関係に対する研究動向調査の結論として以下の3点を指摘する。第一にこの領域への一般の人々の興味が現在増加しているのに対し、学問的研究はその成果の提出までに時間を要するため、現段階では大衆の期待する水準のものを提出するには至っていないということである。第二に、キリスト教もイスラームも一枚岩の概念ではなく、より詳細な研究（ミラーの言葉で言えば新しい枠組み）が必要であるということ、そして最後に、大半の研究が中世に焦点を当ててなされており、近世初期に対してなされた研究は多くないということである<sup>(3)</sup>。

ミラーによる研究動向、またその中で紹介される重要な文献は今日においても無視できるものではない。一方で、彼による研究動向の調査から10年以上が経過した現在、より新しい諸文献を加えた調査が必要となっていることも確かであろう。本稿ではキリスト教－イスラーム関係についての歴史的研究に注目し、ミラーによって指摘される重要文献の一部に2000年以降に英語あるいは日本語で発表された重要な一連の研究を加え、現在の研究動向を描き出すことを目的とする。さらに中世アンダルシアにおいて記された著作が17世紀英国の宗教的アイデンティティ形成に関与したという2012年の研究を例に、キリスト教－イスラーム関係史研究において今日進行しつつある時代的・領域的拡大を紹介する。

## 2. キリスト教－イスラーム関係史への注目と諸研究—1960年代から2000年前後まで—

### 2.1 20世紀におけるキリスト教－イスラーム関係史研究の成立

キリスト教とイスラームの関係についての研究は西洋において、第二次世界大戦後、あるいは第

一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期に盛んになったとされる。例えば、この主題に関する重要な研究者の一人としてミラーが挙げる R. W. サザーンは、その主著において西洋の研究者が本格的にイスラームに目を向けたのは 1945 年以後であると述べる<sup>(4)</sup>。同主題の研究史についてより充実した記述は、中世から近世の西洋におけるイスラーム観などを研究する歴史学者 D. R. ブランクスと中世キリスト教史研究者 M. フラッセットの編集による論文集に見出される<sup>(5)</sup>。とりわけブランクスは、キリスト教－イスラーム関係を主題とする研究史についてより詳細な記述を残している<sup>(6)</sup>。彼によれば、実際は北米でもヨーロッパでもイスラーム世界からキリスト教への影響の研究は、第二次大戦以前から進められていた。しかし、北米の研究者が同じ課題に取り組んでいたとヨーロッパの研究者たちに認識されたのは、第二次大戦後であった。また、20 世紀より前においても両宗教の関係を扱った研究が存在しなかったわけではない。例えば、イスラームに対するヨーロッパからの態度が研究の対象となり始めたのは 19 世紀のことである。1830 年代には、イスラームに対する中世キリスト教徒の態度を検証するために同時代に記された詩が研究の対象とされた。しかしながら、これらは現代におけるキリスト教－イスラーム関係史において重視されていないため、ここでは詳細に述べる必要はないであろう。

## 2.2 1960 年代の重要な研究とその評価

20 世紀以降におけるキリスト教－イスラーム関係の研究史を記述するとき、西洋におけるイスラーム観を研究の主題とした 1960 年代前後の研究者たちが注目される。すなわちムスリムの敬虔さとイスラームの霊性に対する中世キリスト教徒の不十分な理解を反映したまま、現代の西洋におけるイスラーム観が形成されていると主張する中世史研究者 N. ダニエル、中世キリスト教徒のイスラーム理解が時期によって異なることを指摘した歴史学者 R. W. サザーン、西洋世界が非西洋世界の多様性を考慮せずに東洋として一様に捉えてきたことを指摘する比較文学者エドワード・サイードの 3 者である。ブランクスは、その包括性において未だに乗り越えられていない研究としてダニエルの主著 *Islam and the West: The Making of an Image* (1960) とサザーンによる *Western Views of Islam in the Middle Ages* (1962) (鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラム世界』, 1980 年邦訳出版) を挙げる。またミラーも前掲論文において、過去 30 年の間にキリスト教とイスラームの関係史に大きな影響を与えた人物がこの 3 名であると述べる。だが、これらの諸研究に対するブランクスとミラーの評価はいくらか異なる。

ブランクスとミラーの両者が特に注目するのは、同時期に主著を発表した (サイードの主著『オリエンタリズム』は 1978 年出版) ダニエルとサザーンである。ミラーは、今日のキリスト教－イスラーム関係史研究は、それを西洋の歪曲されたイスラーム像に由来する対立の歴史として捉えるダニエルによる枠組みを採用していると述べる。したがって今日も最も適切なままであるのは、ダニエルの研究であるとする。一方で、ブランクスは全ての中世ヨーロッパ人がイスラームに対して寛容さと人間性を欠いていたと示唆するダニエルの説は不正確であると評価する。サザーンは、ヨーロッパにおけるイスラーム理解は時代によって異なると主張した。すなわち、1120 年頃にはヨーロッパのキリスト教徒全体がイスラームの存在を認識し、預言者ムハンマドが何者であるかを理解していた。とはいえムハンマドに対する中世の描写は、預言者としてではなく詐欺師あるいはキリスト教の異端者の一人、というものであった。イスラームについての正確な知識は徐々にヨーロッパ

にもたらされたのであり、12世紀の最初の40年間はイスラームの虚像が作られた時期であった。サザーンはこの時代を「無知の時代」と呼び、イスラームに対するより正確な描写が広まった12世紀中盤以降を「理性と希望の時代」とし、ヨーロッパにおけるイスラーム理解が中世においても一様ではなかったと指摘する。ブランクスは、ダニエルと対比されるこうしたサザーンの態度に対して、キリスト教徒とムスリムの間にあったニュアンスに対して敏感であったとより高く評価するのである。

### 2.3 1960年代以降の研究の傾向

前近代ヨーロッパのキリスト教－イスラーム関係史について、ブランクスは以下の2点を指摘する。すなわち1960年代初頭以降、つまりダニエルやサザーンら以降、①研究関心が全体として細分化の方向に進んでいる点、②研究者の注目が中世のイスラーム観よりは西洋におけるトルコのイメージに主に向けられる点である。だが、筆者が見るところ、中世についてのキリスト教－イスラーム関係研究は多くの蓄積をもち、1990年代においても同分野の中心的位置を占めているようである。例えばブランクスとフラッセットが編集し、先述のブランクスによる論文が掲載された1999年出版の *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other* を見てみよう。そこには11本の論文が収録されているが、オスマン帝国やトルコに言及したものはわずか2本である。

以下では、同書に収められた諸論文が扱う内容をいくつか手短かに紹介し、ブランクスの指摘をふまえて1960年代以降の研究の傾向を検討する。J. A. H. M. クルズ<sup>(7)</sup>とM. フラッセット<sup>(8)</sup>はともに、12世紀の西洋における年代記や武勳詩などにおいて、サラセン人が騎士道精神に適う存在としても、不道德な偶像崇拜を行う異教徒としても描写されていることを示し、中世ヨーロッパにおけるイスラームのイメージが一樣ではなかったことを述べる。また、N. デュリン・マロリー<sup>(9)</sup>と、G. アレール<sup>(10)</sup>も、ヨーロッパ人が書いた物語中のサラセン人のイメージを論じる。D. J. カゲイは、ムスリムとキリスト教徒が相互依存的関係にあったことを、中世イベリア半島の法と年代記における描写をもとに示し<sup>(11)</sup>、E. N. コールバックはイスラーム哲学由来の語が取り入れられた13世紀の聖書注釈集を取り上げ、キリスト教神学の中にアラブ－アリストテレス的要素が導入されたことを述べる<sup>(12)</sup>。近世初期を扱った論文は、前述のとおり2本のみである。N. ビサハは文明的西洋対野蛮な東洋という近代的イメージが15世紀の人文主義者たちによって形成され始めた<sup>(13)</sup>と指摘し、D. J. ヴィックスは17世紀においてもムハンマドの歪んだイメージが流布し続けたことで、異教徒にして野蛮というイスラーム観が定着したと述べる。彼によれば、イスラームに対する寛容に人々が賛同し始めるのは17世紀後半のことである<sup>(14)</sup>。これらの諸研究からは、ブランクスの上記②の指摘に反して、中世キリスト教徒のイスラーム観に関する研究は多様な資料（物語、年代記、聖典や聖典への注釈、法など）を基礎に1960年代以降も盛んであることがうかがえる。

国内における最新の研究の一つとしては、神崎忠昭編『断絶と新生——中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』（2016）が挙げられる。同書は2012年から2014年に行われた慶應義塾大学の研究プロジェクトによる成果をもとにしており、「断絶」と「新生」というテーマに沿って、キリスト教世界とイスラーム世界における多様な時代や切り口から提出される10の論文によって構成される。

以下では、キリスト教とイスラーム双方への言及がある論文を取り上げて紹介する。関哲行<sup>(15)</sup>と佐藤健太郎<sup>(16)</sup>はアンダルシアに焦点をあてた歴史学的考察を行う。関は 1492 年のカトリック諸国によるグラナダ陥落以後、イスラームからキリスト教への改宗者（モリスコ）がキリスト教徒の共同体へ同化することが困難だったと述べる。モリスコへの圧迫は徐々に増し、1568 年の第 2 次アルプハラス反乱の結果、彼らの多くが国外に追放され、この結果をもってレコンキスタが完全に成し遂げられたことが示される。佐藤は前述のモリスコ追放以後、北アフリカ特にチュニジアに移住したモリスコの文化に焦点を当てる。彼らはスペイン語とアラビア語の両方を駆使して優れた著作を残しており、スペインからのモリスコ追放が必ずしも歴史上の悲劇的側面のみを際立たせるものではないと述べる。岩波敦子<sup>(17)</sup>と山内志朗<sup>(18)</sup>はキリスト教とイスラームの接触の結果生じた、中世における知的変化を論じる。岩波は 12 世紀にスペインとシチリアを中心として行われた翻訳活動によってギリシアの哲学、自然科学、イスラーム科学に関する文献が大量に翻訳され、ヨーロッパにもたらされたことを述べる。論文の中心となるのは天文学・占星術に関する文献のヨーロッパへの受容と影響であるが、同時に岩波は 12 世紀の翻訳活動の以下の 3 つの特徴を提示する。①一人の人物が天文学、医学、数学といった多分野の文献を翻訳していること、②原典一つに対して複数の訳が存在すること、③アリストテレスの翻訳が多くなされ、その知がヨーロッパに伝えられたことである。中世哲学を専門とする山内は、アヴィセンナの用いた「もの」(shay') 概念と中世西洋の形而上学における「もの」(res) の差異を提示する。すなわち前者は実際にはこの世に存在しない概念的なものをもその語の範疇に含むのに対し、後者は具体的に存在するものを指している。山内は、ガンのヘンリクスを例に、アヴィセンナの「もの」概念が西洋哲学に取り入れられ、存在論に非存在という概念をもたらしたと結論づける。この論文集は取り上げる時代こそ書名の通り中近世に限定しているが、キリスト教－イスラーム関係研究が歴史学、哲学などの多様な学問分野から発表されていること、また地域的にもアフリカ大陸をも含み幅広く論じていることが特徴である。

以上のように、本節では 1960 年代以降のキリスト教－イスラーム関係史の論文集を紹介してきた。上記の両著作の共通性として個々の論文で取り上げられる資料と地域の多様化が挙げられる。その理由として、この分野の研究の進展により、従来注目されていなかった資料が研究対象に入ってきたことが考えられる。この点において、ブランクスが上記①で指摘したようにキリスト教－イスラーム関係の研究関心は細分化せざるを得ないと言いうるだろう。その一方、ダニエルが中世のキリスト教徒によるイスラーム観を現代のそれに結びつけたような、キリスト教－イスラーム関係の全体像を俯瞰して統合しようと試みる学問的研究<sup>(19)</sup>は少数にとどまる。その例として、キリスト教－イスラーム関係を通史的に論じたゴダードによる研究<sup>(20)</sup>が挙げられる。同書の特徴は、イスラーム出現から 20 世紀に至るまでのキリスト教－イスラーム関係を通史的に構築しようと試みることである。キリスト教の立場からの記述のみを用いるのではなく、イスラーム側の記述も含めた偏りのない記述を行っている点も興味深い。また、冒頭の年表ではキリスト教の歴史、イスラームの歴史と並列して、キリスト教とイスラームの双方に影響のあった出来事、人物の生没年が時代に沿って記述されており、相互の関係史を一望することが可能である。

### 3 *The History of Christian-Muslim Relations* と *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History*

#### 3.1 *The History of Christian-Muslim Relations* の刊行

前章ではキリスト教－イスラーム関係の研究動向と重要な諸研究について述べてきた。本章では今日、同分野において見逃すことのできない研究である *The History of Christian-Muslim Relations* シリーズを紹介する。

2003年から Brill によって刊行が開始されたこのシリーズ全体の編者は、D. トマス、T. ハーリディー、G. J. レイニンク、M. スワンソンの4人である。D. トマスはイスラーム思想、イスラーム神学、イスラームにおけるキリスト教徒を主に研究対象とする。T. ハーリディーはイスラーム史研究者であり、G. J. レイニンクはアラム語・セム語文学で業績を残しキリスト教神学にも通じた人物である。M. スワンソンは聖典を中心としたキリスト教－イスラーム関係史、中東のキリスト教を中心とした研究を行っている。このシリーズは、研究者のみならず学生や一般の読者に対してもキリスト教とイスラームの間に起こってきた論争や弁明などの記録を含む両宗教の関係史を提示するという目的をもって編纂されている。すなわち研究者に対しては両宗教の一方から他方への態度を知りうる原語（アラビア語、シリア語、ギリシア語、ラテン語など）での資料を提示し、学生や一般の人々には両宗教間の態度形成の根幹に、両者の聖典による記述のみならず歴史的・文化的文脈が存在することを提示しているのである。

*The History of Christian-Muslim Relations* 各巻の構成は一様ではない。例えば第1巻（2003年出版）<sup>(21)</sup>は、2001年に英国で行われた「アッバース朝期（750－1258）のイラクにおけるアラブキリスト教」というシンポジウムで発表された複数の原稿をまとめたものである。一方、第3巻は13世紀エジプトのコプト人殉教者の手による文献が、単独の著者によって解説と共に論じられる形式となっている。サブシリーズである *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* を含め、現在33巻まで出版されている同シリーズは、8世紀頃から19世紀にわたるキリスト教とイスラームの関係に言及する多くの論文を掲載しており、この企画によって、キリスト教－イスラーム関係史研究には、大きな進展が起きている。

なかでも、本稿では *The History of Christian-Muslim Relations* のサブシリーズである *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* に注目する。このサブシリーズは、7世紀から17世紀にかけてキリスト教－イスラーム関係に関連した著作を残した代表的な人物とその著作リストを収録している。ここに収録されている作家は非常に多く、幅広い時代・地域を扱っているので、今日、キリスト教－イスラーム関係史を研究するうえで重要な文献となっている。

#### 3.2 *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* の構成と近世を対象とする諸研究

*Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* は、各巻が対象とする時代におけるキリスト教－イスラーム関係を説明したイントロダクション、該当する時代のキリスト教－イスラーム関係を主題とする諸論文、両宗教の関係についての文献を執筆した人物別の項目、索引によって構成される。人物別の項目では、その人物の生没年、生没地、伝記、伝記に関する典拠が最初に記される。次いで、その人物のキリスト教とイスラームの関係に関する著作が、執筆された時期、原語、著作の説明、重要性、写本、校本と翻訳、その著作に対する研究と項目立てで列挙されている。

各巻冒頭に収められている論文は多数に上るため、イスラームの文献をヨーロッパに導入した近

世初期までの翻訳活動という筆者の関心に基づいて、いくつか紹介してみよう。

まず、1350年から1500年を範囲とした第5巻からJ. P. M. サラの論文<sup>(22)</sup>を取り上げる。ここでは、イベリア半島が持っていた、ヨーロッパの他の地域と比較して例外的な地位について強調される。同地域では、アラビア語の使用がキリスト教徒によっても誇りとされていた。この理由はイベリア半島がイスラームの支配下であったということのみではない。1085年にはトレドが陥落し、キリスト教徒の支配下に収まる。しかし12世紀から13世紀のものと推定される法的文書などからは、アラビア語がキリスト教治下において使用され続けていたことがわかるとサラは述べる。イベリア半島におけるキリスト教とイスラームの接触は、翻訳された書物を通じてのみではなかった。サラの論文では、15世紀のクルアーン翻訳をめぐるキリスト教徒とムスリムの協力が例として挙げられている。すなわち、15世紀にはアラビア語、カスティーリャ語、ラテン語の3言語で記されたクルアーンが出現する。この翻訳作業に携わったのはキリスト教聖職者であったセゴビアのフアンとムデハル（キリスト教治下のムスリム）であったイーサー・ギデルリ（イーサー・アル・シャーディリー）であった。イーサーはアラビア語からカスティーリャ語に、フアンはカスティーリャ語からラテン語への翻訳を行った。フアンはイーサーによってアラビア語を教えられ、イスラームの信仰を学ぶことへの興味を得たという。

次に、1500年から1600年を対象とする第6巻から、16世紀から17世紀英国におけるクルアーンの翻訳を扱ったN. マターによる論文<sup>(23)</sup>に焦点を当てる。彼は、詐欺師としての預言者ムハンマドという中世に形成されたイメージは、英国においてもイスラームへの否定的見方として17世紀末まで継続していると言う。実際、1697年にはノリッチの司教プライドーによって、そのようにムハンマドを描いた伝記が出版されている。イスラームに対する否定的態度がとられた理由についてマターは、①16世紀から17世紀の英国ではイスラーム研究者の大半がキリスト教の聖職者であったこと、②中世の尊者ピエールからルターまで、クルアーンはそれを論破するために研究すべきという伝統があったためと指摘する<sup>(24)</sup>。その後英国では1734年に初めてアラビア語原典からジョージ・セールという非聖職者によって英訳されたクルアーンが出版される。そして、この翻訳は19世紀に至るまで標準的なものとなった。近世ヨーロッパにおけるクルアーンの翻訳に関しては、T. E. バーマンによっても通史的に扱われている<sup>(25)</sup>。彼はラテン語版クルアーンからヨーロッパ諸語への翻訳について述べるが、その際、原典として最も影響力をもったのは1698年のマラッキによるラテン語訳であったとする。

### 3.3 *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* におけるイベリア半島への注目

前節では、*Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* から、中世から近世初期のヨーロッパにおけるアラビア語原典のヨーロッパ諸語への翻訳を扱った研究を紹介してきた。中世における翻訳活動の中心地の一つであったイベリア半島は、キリスト教とイスラーム関係史において重要な場所であり続けている。D. トマスも第4巻の巻頭でキリスト教とイスラームの接点としてのイベリア半島に言及する。12世紀よりも以前、8世紀頃からイベリア半島はムスリムとキリスト教徒が政治的、宗教的にせめぎ合う地域であった。711年にコルドバがイスラームに侵攻され、以後長きにわたってイベリア半島はイスラームの治下に置かれ、イベリア半島に居住するキリスト教徒はムスリムからの迫害の時代も、比較的穏やかな共存の時代も経験してきた。9世紀から10世紀

にかけて、ムスリムはフランス南部にまで勢力を広げるが、11世紀にはすでにそれらヨーロッパの土地は失っていた。12世紀にはセビーリヤが北アフリカのベルベル人を中心とするムラービト朝の首都として栄えるが、1212年、ムラービト朝カリフのムハンマド・アル・ナーシルがキリスト教諸王国に打ち負かされたのを機に、アンダルシアは徐々にムスリムの支配を脱してゆく。この13世紀から14世紀は両宗教の戦いに彩られているが、戦争は必ずしもキリスト教とイスラームの関係を決定づけるものではない、とトマスは述べる。彼はその根拠として3つの事実を提示する。第一にそれぞれのキリスト教徒あるいはイスラームの派閥が、異なる宗教集団と政治的同盟を結ぶ場合があったこと。第二に北アフリカ諸国を中心にキリスト教徒とムスリムの商業的交流は絶えなかったこと。第三にシリアなどの土着のキリスト教徒たちが書き言葉としてアラビア語を習得するなど、文化的相互作用が消え去らなかつたことである<sup>(26)</sup>。

さて、12世紀、シチリアとスペインの修道院を中心にギリシア語やアラビア語の文献の翻訳が行われたことは、既に1927年のハスキンズの古典的著作『十二世紀ルネサンス』(邦訳は1985年と1989年に出版)によって知られているとおりである。ハスキンズは翻訳活動が行われた12世紀とその前後を12世紀ルネサンスと呼ぶ<sup>(27)</sup>。この時期の特徴は、前述の岩波による論文でも挙げられているように、翻訳が哲学や科学の分野を中心になされたことである。*Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History*では近世ヨーロッパにおけるクルアーン翻訳をめぐる論文が収録されているが、キリスト教－イスラーム関係を翻訳に基づいて捉えようとした場合、同シリーズが提示する文献の範囲には限界がある。というのも、同シリーズに収録される作品は、①キリスト教、あるいはイスラームの信仰について一方から他方に対して記されているか、②一方から他方の信仰に対する(キリスト教からイスラームへ、あるいはイスラームからキリスト教への)重要な判断や情報を含んでいるかを基準に選択されているためである。それゆえ著作中には他の信仰への言及が見られないとしても、その翻訳過程において翻訳者の宗教的立場が問題となりうるような作品は注目されていない。この一例として、12世紀イベリア半島で活動したトゥファイユと彼の主著が挙げられる。

イブン・トゥファイユは、1100年あるいは1110年に現在のスペイン、グラナダの北東に位置する都市ガディスにムスリムとして生まれ、生涯ムスリムとして生きた人物である。彼は1154年頃からムワッヒド朝に出入りし、当時の君主アブー・ヤアクーブ・ユースフの第一侍医となり、1185年、マラケシュで没した。彼の主著である『ヤクザーンの子ハイイの物語』は、1182年の宮廷からの引退数年前あるいは1160年、あるいは1170年頃に著されたとされる。

『ヤクザーンの子ハイイの物語』のあらすじを紹介しよう。主人公ハイイは無人島で牝羚羊に育てられ、周囲で生活する様々な動物たちの行動や身体の構造を観察する。そして、牝羚羊の死後にはその死体を解剖することによって、生き物の身体を動かす目に見えない何らかのものの存在を確信する。その後、自然界に存在するあらゆるものについて観察し、理解を深める。さらにその思索の対象は事物の本性などに及び、あらゆる事物が本質において創造者から生み出された被造物として一つであることを知る。そしてこの創造者の性質を探究すると同時に、自分自身にも創造者と同じ性質があることを認識する。そして自分の性質を創造者に近づけるために動物たちや天体の性質を模倣する。さらには創造者のみに集中し、創造者のみを観照する境地に達する。この境地に至ってしばらく後、ハイイの住む島にアブサールという人物が訪れる。アブサールとハイイは偶然に出

会い、ハイイはアブサールの言葉を習得し、また彼の信じる宗教の教えを知る。その教えが自分の獲得した真理と同じものであることを確信し、ハイイは自らムスリムとなった。その後、ハイイは自分の知る、より明瞭な真理を多くの人々に開示するべきという思いから、アブサールと共に無人島を出て、アブサールの故郷である島へと赴き、そこに住む人々に自らの知る真理を説くことを試みる。しかしその真理を人々が理解することはなかった。結局、ハイイは真理に至ることのできない人々が存在することを認め、彼らにとっては今まで通り、宗教によって規定される儀礼や義務などの外面的行為を続けることが最善であると確信する。人々の教化を断念したハイイとアブサールは再び無人島へと戻り、天寿を全うするのである。

トゥファイルの著作には、キリスト教に対する直接的言及はなく、キリスト教の信仰に対して重要な見方を直接的に提供しているわけでもない。それゆえ、この著作が *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* の収録対象とならないことは明らかである。それでも『ヤクザーンの子ハイイの物語』を巡る近年の研究は、キリスト教—イスラーム関係史の研究対象と範囲の再定義に対して重要な例を提示している。次章では、『ヤクザーンの子ハイイの物語』を例に、*Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History* のみでは把握できないキリスト教—イスラーム関係史の一側面を紹介する。

#### 4. キリスト教—イスラーム関係史の拡大—トゥファイル研究の動向を例に—

##### 4.1 トゥファイル研究の全体的動向—1990年代以降—

トゥファイルと彼の著作に関する研究がまとまって出版されたのは1990年代である。まず、1986年にはアラビアに関する話題について様々な分野の研究者が集まったシンポジウムがロンドンで行われた。この成果は1994年に出版されたが、その一部にG. A. ラッセルによる、ジョン・ロックに対する『ヤクザーンの子ハイイの物語』の影響を論じた研究がある<sup>(28)</sup>。その2年後の1996年には、Wellcome Instituteにおいて行われた、トゥファイルと『ヤクザーンの子ハイイの物語』に関するシンポジウムをまとめた論文集<sup>(29)</sup>が出版された。この論文集に含まれる研究は、イスラーム哲学、スーフィズム、アンダルシアの伝統、トゥファイルの物語の主題など多様な切り口からなされているが、そこにはいくつかの傾向が見られる。以下では、そのいくつかを主題ごとにまとめて紹介しよう。

文学的研究としては、F. マルティーダグラスの論文<sup>(30)</sup>とL. I. コンラッドの論文<sup>(31)</sup>が挙げられる。マルティーダグラスは、『ヤクザーンの子ハイイの物語』が『ロビンソン・クルーソー』の原型であるという説に対して両者の相違点を3つ提示する。それは、①クルーソーは大人として無人島に漂着するが、ハイイは無人島で子供から大人へと成長してゆくこと、②クルーソーは生活用品や知識を無人島にたどり着いた時からもっていたのに対し、ハイイは島でそれらを一から獲得したこと、③クルーソーとフライデーは帝国主義者とその家臣という関係であり、ハイイとアブサールの対等な関係とは全く異なる、というものである。また、コンラッドは『ヤクザーンの子ハイイの物語』の主題を一つに定めようとする傾向に異議を唱える。中世以来、『ヤクザーンの子ハイイの物語』の解釈は多種多様であった。その例として彼は、『ヤクザーンの子ハイイの物語』は人類の起源を自然科学的に説明することを目的とするという主張、神学的作品としてその著作を捉えた解釈、アダム物語の秘教的表象であるという解釈などを紹介する。コンラッドは最後に、『ヤクザーンの子ハ



『イイの物語』は様々な問題に通じる要素を含んでおり、論者の立場によって多様な主題を提示されうると結論づける。

トゥフファイルを他のイスラームの諸伝統と比較した研究として、V. J. コーネル<sup>(32)</sup>と B. ラドック<sup>(33)</sup>による論文が挙げられる。コーネルはスーフイズムに着目し、トゥフファイルとほぼ同時代に生きたスーフイーのイブン・アル・アーリフとの差異を提示する。その一つが、両者の自然観の相違に由来する、靈的な師の必要性という論点である。トゥフファイルは、自然を探究することによって人間は正しい道を独力で選び取ることができると考えた。対してアーリフは、自然は誤りを含むものであり、人間が正しい道を選択するためには靈的な師による導きが不可欠であるとしている。ラドックは、トゥフファイルの思想をイスラーム哲学者のイブン・シーナーやキンディーと比較する。イブン・シーナーによる神との神秘的合一に至る過程の描写は、トゥフファイルの描くそれと類似している。しかしイブン・シーナーが真の合一は生きていうちには達せられないと述べるのに対して、トゥフファイルは真の合一が生きていうちに達せられることを否定していない。一方キンディーは、魂は禁欲的、哲学的生を送ることによって再び神と似たものになりうると述べる。したがって、ラドックは、神との直接的合一に至る必要条件として哲学的生活を挙げる点においてキンディーの思想がトゥフファイルにより類似していると結論づける。

上記の 1996 年の論文集以後のトゥフファイルに関するまとまった研究としては、2007 年の S. アッタールによる著書<sup>(34)</sup>が挙げられる。アッタールは『ヤクザーンの子ハイイの物語』の文学的側面に注目し、この物語の主題に対して『ロビンソン・クルーソー』などを例に議論を進め、異なる思想や立場をもつ他者に対する寛容性がその主題であるとする。アッタールの研究の特徴として、17 世紀英国における『ヤクザーンの子ハイイの物語』の翻訳をめぐる問題を取り上げていることが挙げられよう。この問題をめぐって注目すべきは、E. M. N. クーグラーが 2012 年に出版した、17 世紀英国のアイデンティティ形成に関する研究<sup>(35)</sup>である。クーグラーは『ヤクザーンの子ハイイの物語』の他に、『オセロー』、『オルノーコ』といった舞台化された文学作品を取り上げ、イスラームとわりわけオスマン・トルコの表象が英国の世界への台頭に伴って変化したこと（例えばムーア人オセローを演じる俳優の肌の色の变化など）について論じる。

以上から、トゥフファイルに関する 1990 年代以降の研究の傾向は、①文学的側面に着目する、あるいは『ヤクザーンの子ハイイの物語』をあくまで物語と捉えてその主題を読み解こうとする諸研究（マルティエダグラス、コンラッド、アッタール）、②イスラーム哲学やスーフイズムと比較してイスラーム思想におけるトゥフファイルの位置を確立しようとする諸研究（コーネル、ラドック）、③『ヤクザーンの子ハイイの物語』の翻訳に着目して、翻訳者やその翻訳過程を通じた西洋への影響を考察する諸研究（ラッセル、アッタールの研究の一部、クーグラー）に大別されよう。次節ではこれら 3 つの傾向のうち、キリスト教－イスラームの関係にとって重要な③の研究を取り上げる。

#### 4.2 ヨーロッパとトゥフファイルの関係に着目してなされた諸研究

前述のようにトゥフファイルの著作はキリスト教への直接的言及を含まないものの、それはキリスト教世界への影響がないことを意味しない。というのも、『ヤクザーンの子ハイイの物語』は数世紀をかけてヨーロッパ諸語に翻訳されており、その過程は以下の年表に示す通りである<sup>(36)</sup>。

1349 年 モーゼス・ナルボニがヘブライ語に翻訳

- 15 世紀半ば ピコ・デラ・ミランドラがヘブライ語訳に基づきラテン語に翻訳  
 1671 年 E. ポウコックが英国でアラビア語からのラテン語訳を出版  
 1672 年 ポウコックの訳に基づくドイツ語訳の出版  
 1674 年 クエーカーの G. ケイスがポウコックのラテン語訳を英訳し出版  
 1686 年 G. アシュウェルが英訳を出版  
 1701 年 1672 年とは別のドイツ語訳がアムステルダムで出版  
 1708 年 国教会牧師 S. オクリーがアラビア語からの英訳を出版  
 1726 年 G. プリティウスがドイツ語訳を出版  
 1782 年 G. アイヒホルンがドイツ語訳を出版

前節で述べたラッセルの研究は、ロックに対する『ヤクザーンの子ハイイの物語』の影響を主張しており、啓蒙思想家に対するトゥフファイルの影響を指摘する際、コンラッドやアッタールはこの研究を根拠とする。しかし、今日のトゥフファイル研究では、ラッセルの主張には根拠が薄弱という問題が指摘されている。ラッセルは、『ヤクザーンの子ハイイの物語』の翻訳者ポウコックの父親で、オックスフォード大学最初のアラビア語の教授とヘブライ語の欽定講座担当教授を務めた人物とロックが親しい関係にあったと言う。それゆえロックが『ヤクザーンの子ハイイの物語』のラテン語訳を入手し、一度は読んだ可能性が非常に高いとラッセルは主張する。ただしラッセルは、トゥフファイルからロックへの具体的な思想的影響については詳細に述べておらず、単に『ヤクザーンの子ハイイの物語』が翻訳・出版された時期とロックが自身の思想的転機となる『人間知性論』の草稿に着手した時期が重なると述べるのみである。これに対し、クグラーが 2012 年に、トゥフファイルからロックへの影響があったか否かについてのラッセルの研究には議論の余地があると述べており、ラッセルへの評価が近年、変化しつつあることがうかがえる。クグラーによる研究が提示する視点は、無批判に受け入れられていたラッセルの説に疑問を投げかけただけでなく、キリスト教－イスラーム関係史の一つとしてのトゥフファイル研究としても興味深い。

クグラーによれば、17 世紀英国における『ヤクザーンの子ハイイの物語』の翻訳をめぐる論争からは、英国国教会と非国教会の対立、英国が宗教的アイデンティティ確立のためにアラビア語やイスラームを利用していたことがわかるという。17 世紀、英国は国家的にも宗教的にもアイデンティティを確立する途上にあつた。英国国教会はローマカトリックから区別して自らを確立する際に、アラビア語も用いながら東方の諸教会を自身のモデルとして参考にした。このアラビア語への学問的関心を生み出したのがポウコックによる『ヤクザーンの子ハイイの物語』の翻訳であつた。問題となる翻訳は、クエーカーであつたケイスによるものと、英国国教会牧師であつたオクリーによるものである。ケイスは、主人公ハイイが社会から離れて孤独のなかで真理を知ったことから、『ヤクザーンの子ハイイの物語』はクエーカーである自身の宗教生活に適用できると強調した。一方、オクリーはトゥフファイルとケイスは共に狂信的であると軽蔑の眼差しを向けたため、結果的に彼はトゥフファイルに代表されるイスラームをも批判することになる。しかし、オクリーが真に軽蔑するのはイスラームそのものではなく、国家としての英国のアイデンティティを宗教的に脅かす非国教会とケイスであつたとクグラーは述べる<sup>(37)</sup>。トゥフファイルに対するオクリーの態度は二面的である。というのもオクリーは、非国教徒に対する否定的イメージを英国社会が確立した後、『ヤクザーンの子ハイイの物語』を英国国教会側の立場に置いて肯定的に評価したためである。すなわちオクリー

は、『ヤクザーンの子ハイイの物語』においてハイイの達した境地を大衆が理解しない場面について、一般の人が高い宗教的境地にむやみに近づくべきでないことを示すと解釈するのである。このように、クーグラールの研究は、『ヤクザーンの子ハイイの物語』というイスラームの文献の翻訳過程が英国の国家的また宗教的アイデンティティ確立にも関与したことを示している。

## 5. キリスト教－イスラームの関係史をめぐる今後の展望

ムスリムであるトゥファイルによって記された『ヤクザーンの子ハイイの物語』はキリスト教に対する直接的言及を含まない。そのためキリスト教－イスラーム関係に関わる文献としてこの著作を挙げることは、一見したところ不適切であるように思われる。しかし、トゥファイルの著作とキリスト教との接点を指摘する研究もある。4章で取り上げたクーグラールによる研究は、トゥファイルの著作の翻訳をめぐる英国国教会による非国教会への批判が近代英国の国家的・宗教的アイデンティティ確立に寄与したと主張する。この研究は、翻訳過程やその過程での論争を視野に入れることによって、他宗教への言及を含まない文献であってもキリスト教－イスラームの関係を構成する一部として研究対象となりうることを示している。したがって、トゥファイルの著作はキリスト教－イスラーム関係史が対象とする文献の範囲拡大の必要性を示すと言えよう。

以上のことから、この研究分野に対しては、次のような視点や領域の拡大が必要となる。まず『ヤクザーンの子ハイイの物語』の例によって示したように、クルアーン以外の諸文献についても同時代の影響関係のみならず世紀を離れた影響史を考える必要がある。また『ヤクザーンの子ハイイの物語』の翻訳が英国という国家の宗教的アイデンティティ確立に関与した事例のように、キリスト教－イスラーム関係史の研究には宗教学的により興味深い問題が他にも見出せる可能性がある。

しかしながら、翻訳の時期と翻訳者との交友関係のみを根拠に、ロックの著作から具体的な記述を提示することなくトゥファイルからロックへの思想的影響を主張したラッセルの研究のように、再検討を要する研究も存在する。したがって今後は通説となっていた研究の主張が妥当か否かを含め、精査が求められることになるであろう。

## 註

- (1) Gregory J. Miller, "The Past in the Present Tense: Medieval and Early Modern Christian-Islamic Relations in Current Scholarship," in *Religious Studies Review*, vol. 31, no. 3-4, 2005, pp. 155-161. 書籍出版数への言及は p. 155.
- (2) <http://www.bowker.com/products/Books-In-Print.html> (2016年11月15日取得)。ミラーは、どのような条件でこの数字が導き出されたか明言していない。人々のイスラームに対する関心の高まりがこの数字から見て取れると述べるのみである。
- (3) Gregory J. Miller, pp. 160-161.
- (4) R. W. Southern, *Western Views of Islam in the Middle Ages* (Cambridge, Harvard University Press, 1962). 鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラーム世界』岩波書店、1980年。
- (5) David R. Blanks and Michael Frassetto (eds.), *Western Views of Islam in Medieval and*

- Early Modern Europe: Perception of Other*, (New York, St. Martin's Press, 1999).
- (6) David R. Blanks, "Western Views of Islam in the Premodern Period: A Brief History of Past Approaches," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 11-54.
  - (7) Jo Ann Hoepfner Moran Cruz, "Popular Attitudes Toward Islam in Medieval Europe," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 55-82.
  - (8) Michael Frassetto, "The Image of the Saracen as Heretic in the Sermons of Ademar of Chabennes," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 83-96.
  - (9) Nina Dulin-Mallory, " "Seven trewe bataylis for Jesus Sake": The Long-Suffering Saracen Palomides," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 165-172.
  - (10) Gloria Allaire, "Noble Saracen or Muslim Enemy? The Changing Image of the Saracen in Late Medieval Italian Literature," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 173-184.
  - (11) Donald J. Kagay, "The Essential Enemy: The Image of the Muslim as Adversary and Vassal in the Law and Literature of the Medieval Crown of Aragon," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 119-136.
  - (12) Ernest N. Kaulbach, "Islam in the Glossa Ordinaria," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 147-164.
  - (13) Nancy Bisaha, " "New Barbarian" or Worthy Adversary? Humanist Constructs of the Ottoman Turks in Fifteenth-Century Italy," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 185-206.
  - (14) Daniel J. Vitkus, "Early Modern Orientalism: Representations of Islam in Sixteenth-and Seventeenth-Century Europe," in *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other*, pp. 207-230.
  - (15) 関哲行「第2次アルプハラス反乱再考——レコンキスタ運動はいつ終焉したのか」(神崎忠昭編『断絶と新生——中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』慶應義塾大学出版会, 2016年), 209 - 231 頁。
  - (16) 佐藤健太郎「17世紀チュニジアのモリスコ」(『断絶と新生——中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』), 233 - 260 頁。
  - (17) 岩波敦子「中世地中海世界における科学知の継承と占星術的天文学」(『断絶と新生——中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』), 31 - 56 頁。
  - (18) 山内志朗「中世存在論における断絶と改革——超越概念をめぐる」(『断絶と新生——中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』), 57 - 83 頁。
  - (19) ミラーによって紹介される多くの文献は用語法や形式において学問的ではないと評されており、ブランクスとフラッセットによる本稿で取り上げた論文集を除き、1960年代以後の研究

として学問的に評価されるものは少ない。

- (20) Hugh Goddard, *A History of Christian-Muslim Relations* (Edinburgh, Edinburgh University Press, 2000).
- (21) David Thomas (ed.), *Christians at the Heart of Islamic Rule: Church Life and Scholarship in 'Abbasid Iraq* (Leiden-Boston, Brill, 2003).
- (22) Juan Pedro Monferrer Sala, "Somewhere in the 'History of Spain': People, languages and texts in the Iberian Peninsula(13<sup>th</sup>-15<sup>th</sup> centuries) ," in *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 5 (1350-1500)*, eds. by David Thomas and Alex Mallett (Leiden-Boston, Brill, 2013), pp. 47-59.
- (23) Nabil Matar, "The Qur'an in English writings, 1543-1697," in *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 6. Western Europe (1500-1600)*, eds. by David Thomas and John Chesworth (Leiden-Boston, Brill, 2014), pp. 11-24.
- (24) *Ibid.* p. 23.
- (25) T. E. Burman, "European Qur'an translations, 1500-1700," in *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 6. Western Europe (1500-1600)*, pp. 25-38.
- (26) David Thomas and Alex Mallett (eds.), *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 4 (1200-1350)* (Leiden-Boston, Brill, 2012), pp. ix-xi.
- (27) 現代においては、12世紀ルネサンスという語は、それぞれの研究者によって定義されるようになっている。例えば、伊東俊太郎は『十二世紀ルネサンス——西欧世界へのアラビア文明の影響』(岩波書店、1993年)において、自身の定義する12世紀ルネサンスはアラビア、ビザンチン、西ヨーロッパの文明的交流を見る試みであり、ハスキنزのように12世紀ルネサンスを西ヨーロッパ史の枠組みで捉えるのではないと述べ、この語に新たな定義を与えている(伊東、前掲書、24頁)。D. ラスカムも『十二世紀ルネサンス——修道士、学者、そしてヨーロッパ精神の形成』(慶應義塾大学出版会、2000年)においてハスキنزに言及するが、ハスキنزのように12世紀ルネサンスを異教、異文化の学問の受容という世俗的側面にのみ着目するのは不十分であると述べ、世俗的学問習得の動機となったキリスト教内部での動きに注目するべきだと主張する。
- (28) G. A. Russell, "The Impact of the Philosophus autodidactus: Pocockes, John Locke, and the Society of Friends," in *The 'Arabick' Interest of the Natural Philosophers in Seventeenth-Century England*, ed. by G. A. Russell (Leiden-New York-Köln, E. J. Brill, 1994), pp. 224-265.
- (29) Lawrence I. Conrad (ed.), *The World of Ibn Tufayl: Interdisciplinary Perspectives on Ḥayy ibn Yaqzān* (Leiden-New York-Köln, E. J. Brill, 1996).
- (30) Fedwa Malti-Douglas, "Ḥayy ibn Yaqzān as Male Utopia," in *The World of Ibn Tufayl: Interdisciplinary Perspectives on Ḥayy ibn Yaqzān*, pp. 52-68.
- (31) Lawrence I. Conrad, "Through the Thin Veil: On the Question of Communication and the Socialization of Knowledge in Ḥayy ibn Yaqzan", *The World of Ibn Tufayl: Interdisciplinary Perspectives on Ḥayy ibn Yaqzān*, pp. 238-266.

- (32) Vincent J. Cornell, “Ḥayy in the Land of Absāl: Ibn Ṭufayl and Ṣūfism in the Western Maghrib during the Muwaḥḥid Era,” in *The World of Ibn Tufayl: Interdisciplinary Perspectives on Ḥayy ibn Yaqzān*, pp. 133-164.
- (33) Bernd Radtke, “How Can Man Reach the Mystical Union?: Ibn Tufayl and the Divine Spark,” in *The World of Ibn Tufayl: Interdisciplinary Perspectives on Ḥayy ibn Yaqzān*, pp.165-198.
- (34) Samar Attar, *The Vital Roots of European Enlightenment: Ibn Ṭufayl’s Influence on Modern Western Thought* (Lanham, Lexington Books, 2007).
- (35) Emily M. N. Kugler, *Sway of the Ottoman Empire on English Identity in the Long Eighteenth Century* (Leiden-Boston, Brill, 2012).
- (36) この年表は Attar, xv-xviii の年表をもとに、『ヤクザーンの子ハイイの物語』のヨーロッパ諸語への翻訳を中心に作成した。再版されている場合、初版出版の年号のみを掲載した。
- (37) Kugler, p.47.

#### 参考文献

- Samar Attar, *The Vital Roots of European Enlightenment: Ibn Ṭufayl’s Influence on Modern Western Thought* (Lanham, Lexington Books, 2007).
- David R. Blanks and Michael Frassetto (eds.), *Western Views of Islam in Medieval and Early Modern Europe: Perception of Other* (New York, St. Martin’s Press, 1999).
- Lawrence I. Conrad (ed.), *The World of Ibn Tufayl: Interdisciplinary Perspectives on Ḥayy ibn Yaqzān* (Leiden-New York-Köln, E. J. Brill, 1996).
- Norman Daniel, *Islam and the West: The Making of an Image* (Oxford, Oneworld Publications, 1993 (原著出版年は 1960)).
- Hugh Goddard, *A History of Christian-Muslim Relations* (Edinburgh, Edinburgh University Press, 2000).
- Emily M. N. Kugler, *Sway of the Ottoman Empire on English Identity in the Long Eighteenth Century* (Leiden-Boston, Brill, 2012).
- Charles Homer Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century* (Cambridge, Harvard University Press, 1955 (原著出版年は 1927)). 別宮貞徳・朝倉文市訳『十二世紀ルネサンス』みすず書房, 1989年。
- Gregory J. Miller, “The Past in the Present Tense: Medieval and Early Modern Christian-Islamic Relations in Current Scholarship,” in *Religious Studies Review*, vol. 31, no. 3-4, 2005, pp. 155-161.
- G. A. Russell, “The Impact of the Philosophus autodidactus: Pococke, John Locke and the Society of Friends,” in *The ‘Arabick’ Interest of the Natural Philosophers in Seventeenth-Century England*, ed. by G. A. Russell (Leiden-New York-Köln, E. J. Brill, 1994), pp. 224-265.
- R. W. Southern, *Western Views of Islam in the Middle Ages* (Cambridge, Harvard University Press, 1962). 鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラム世界』岩波書店, 1980年。

David Thomas (ed.), *Christians at the Heart of Islamic Rule: Church Life and Scholarship in Abbasid Iraq* (Leiden-Boston, Brill, 2003).

David Thomas and Alex Mallett (eds.), *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 4 (1200-1350)* (Leiden-Boston, Brill, 2012).

David Thomas and Alex Mallett (eds.), *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 5 (1350-1500)* (Leiden-Boston, Brill, 2013).

David Thomas and John Chesworth (eds.), *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History volume 6. Western Europe (1500-1600)* (Leiden-Boston, Brill, 2014).

伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス——西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波書店，1993年。

神崎忠昭編『断絶と新生——中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治』慶應義塾大学出版会，2016年。

D. ラスカム，鶴島博和訳，吉武憲司編『十二世紀ルネサンス——修道士，学者，そしてヨーロッパ精神の形成 (David Luscombe, *The Twelfth-Century Renaissance: Monks, Scholars, and the Shaping of the European Mind*)』慶應義塾大学出版会，2000年。(本書は日本の諸大学で行われた英語講演をまとめ，翻訳して出版したものである。英語での出版が原著ではないため書中に記された欧文タイトルを併記するにとどめる。)